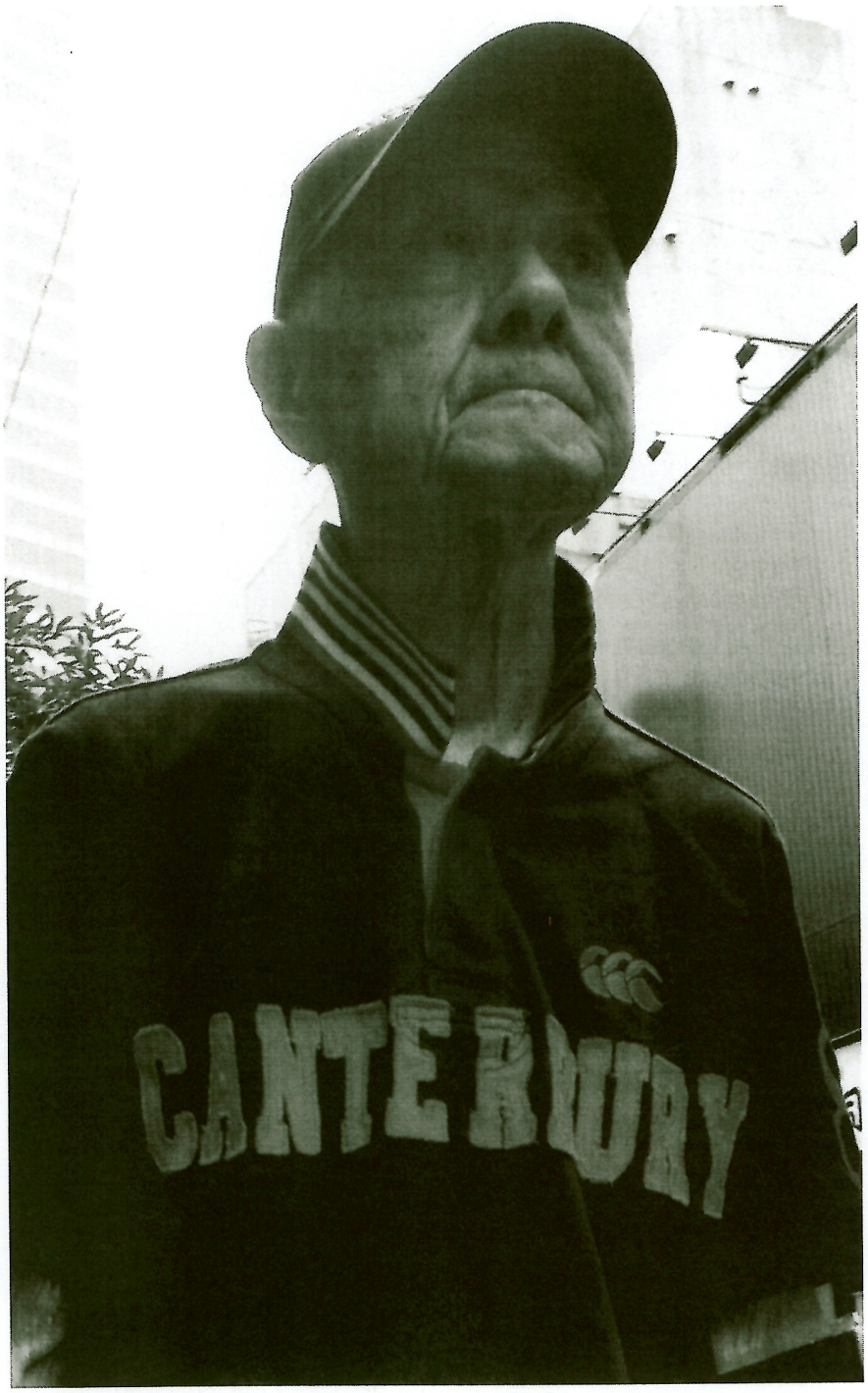
山木幸三郎

宮間利之を偲び ニューハードの思い出を語る

インタビュー・文 重森洋志

日本ビッグバンド界の草分けであり，ニューハードのリーダーとして活躍した重鎮，宮間利之が5月24日逝去した。ここではニューハードの創設メンバーであり，以後現在に至るまで60余年にわたり宮間のかけがえの無い相棒としてバンドを支え続け，特に作曲面からニューハードの名を世界的に知らしめた立役者でもある山木幸三郎に，宮間との想い出やバンドにおける数々のエピソードを存分に語ってもらった。



山木幸三郎(g,comp,arr)

進駐軍のクラブで演奏に明け暮れた日々

またひとつ，日本ジャズ界の巨星が落ちた。5月24日，モダン・ビッグバンドの草分けとして世界から注目されたニューハードのリーダー宮間利之が，94年の天寿をまっとうしたのだ。ニューハードの前身であるジャイブ・エイセスを改編＆増員，スペシャル・アレンジのモダン・スタイルでシーンを歩みだしてすでに63年の歳月が流れていた。その当初から宮間にとっての良き相棒であり，ギタリスト兼作編曲家である山木幸三郎に，今は亡きリーダーとの思い出を語ってもらった。

「僕ももう85歳ですが，宮間さんにはよくぞここまで育ててもらったと感謝しています。中学を出ていくつかのコンボを経ていましたが，それ以後63年間もずっとこのビッグバンドと一緒ですから，青春をぜんぶ宮間さんに奪われちゃったようなもんです(笑)。数年前に宮間さんが立ち上げていたジャイブ・エイセス(1950年結成)が入間ジョンソン基地の“NCOクラブ”の専属になった時，僕のコンボも土日だけショー・バンドとして入替えで入っていたんです。“NCOクラブ”は下士官とその家族の会食場ですから，宮間さんたちがやるのは静かなダンス音楽かディナー・ミュージックばかり。一方で僕たちのはショーで，テーブルに乗っかって演奏したり，床に寝転がってサックスを吹いたりするから，それはウケますよね。それでジャイブ・エイセス

宮間利之とニューハード年表

1921年 宮間利之,千葉市内の料亭「魚岩」の一人息子として生まれる。(10月31日)
1945年 海軍軍楽隊から復員後,クラリネット,アルト・サックス奏者としてバンドを歩き,「後藤博とディキシィーランダーズ」を経て,「レイザー・バック」に加入。
1950年 ニューハードの前身である10人編成の「ジャイブ・エイセス」を結成。東京・練馬にあった(現光ヶ丘)グランド・ハイツの"NCOクラブ"に出演。
1956年 山木幸三郎が「ジャイブ・エイセス」に入団。
1958年 ウディ・ハーマン楽団にちなんで「ニューハード」(新しい群れ)と改称。メンバーも増員し,この頃から指揮者に専念する。
1965年 「モダン・ジャズ三人の会」(前田憲男・山屋清・三保敬太郎)への出演により,芸術祭奨励賞を受賞。
1969年 第1回リサイタルを開催。(9月17日)。
1970年 大阪万博ホールでのコンサートに出演。(8月)
1972年 『邪馬台賦』(東芝)が第27回芸術祭優秀賞受賞。
1974年 《モンタレー・ジャズ祭》に出演して7000人の観衆からスタンディング・オベーションを浴びる。
1975年 《ニューポート・ジャズ祭》に出演,2年連続で世界の桧舞台で大喝采を浴びる。
1978年 交際交流基金の対外文化交流事業の一環として,南米コンサート・ツアーを行ない,ベネズエラ,ボリビア,チリ・コロンビアの4カ国を歴訪。
1984年 東欧(ハンガリー,ユーゴスラビア)国際親善公演実施。
1993年 《ニューポート・ジャズ祭イン斑尾》に出演。
1995年 宮間利之音楽生活50年・ニューハード結成45周年記念コンサートを開く。(5月21日)
2000年 25年ぶりに《JVCジャズ祭》に出演。ニューハード結成50周年記念コンサート開催。
2002年 宮間利之 80th BIRTHDAY 素晴しきジャズの世界開催。
2005年 ニューハード結成55周年 シリーズ・ライヴ TAKE18開催。
2009年 宮間利之の米寿を祝うライヴ開催。
2011年 ニューハード スペースDo シリーズ・ライヴ Vol.1開催。
2012年 宮間利之 卒寿記念コンサート開催。
2013年 ヨコスカ・ジャズ・ドリームス2013出演(東京キューバンボーイズと初共演)
2015年 スペースDo シリーズ・ライヴ Vol.12開催。
2016年 麗人 Reijin Seazon2 コンサート出演(演奏)
5月24日 宮間利之 逝去(94歳)

宮間利之(ldr)

の連中も羨ましがったんだと思います。宮間さんに,コンボ全員をそっちへ入団させられることになるんです」

まだアメリカのポピュラー音楽がどのようなものか,ほとんど誰も聴いたことがなかった時代。宮間自身,アメリカ本土から駐留軍宛てに送られてくる10ピースのストック・アレンジ譜だけを頼りに,さぐり探りでバンドを運営していた。だが山木はたまたま奉公先の息子がジャズ好きで,当時は入手困難だった米軍横流しのジャズ・レコードをそこで聴かせられ,作譜方法まで伝授してもらっていたのだ。入団するとすぐに同じコンボ出身の高見弘(as)と共に自作のアレンジ譜を書きはじめていた。当初はユニゾン・リフをテーマとしていたものが,ウディ・ハーマン楽団やスタン・ケントン楽団やディジー・ガレスピー楽団の音を研究して徐々にモダン化し,やがてそこで生まれ出る音こそがこのバンド最大のカラーとなっていった。

「宮間さんもその頃からアルトは吹かなくなり,指揮に専念するようになっていきます。僕のほうはギター弾きですが,評論家のいソノてルヲさんに薦められて聴いたディジー・ガレスピーのビッグバンドに魅了され,それからは彼のビッグバンドのレコードを買い漁り,聴いて,コピーして,端から端まで勉強しましたね。ガレスピーが僕のアレンジに影響を与えた一番のアーティストであり,今でも神様だと思っています。そしてジャイブ・エイセスの音もそれ以後ビバップ化していき,それを機に宮間さんは

1974年《モンタレー・ジャズ祭》におけるニューハードのステージ。左上に飛び入りしたディジー・ガレスピーの姿が映る。

ご自分が好きだったウディ・ハーマンがつけていたバンド名にあやかり(ファースト・ハード, セカンド・ハード, サード・ハード, サンダリング・ハード)ニューハードと改名するわけです。"新しいハード(小羊の群れ)"の意。その58年からはジョンソン基地で演奏を続けながら, あちこちの駐留軍クラブを巡り, 東京パレスホテル, 銀座三松, 新橋フロリダ, 銀座モンテカルロと, 東京進出を目論んでいきます」

売れっ子歌手から本格ビバップまで月90本の仕事をこなす

60年代のニューハードといえば, 民放の立ち上げによって華やかとなったテレビ時代に即応し, 音楽番組における伴奏バンドの筆頭にのしあがっていく。フジテレビ"雪村いづみのヒットキット・ショー"を皮切りに"ミュージック・フェア", TBSの"チエミ大いに唄う"や"歌のグランプリ", 日テレの"シャボン玉ホリデー"や"光子の窓", NHKの"夢で逢いましょう"や"紅白歌合戦" テレ朝の"アフタヌーン・ショー"…宮間の中央進出におけるひとつの戦術だったかも知れない。が, それ以上にビッグバンド全盛時代にあって, その場で渡されるポップスや歌謡曲の譜面を即座に演奏できるバンドが他になかったのである。しかもカメラを意識するスマイリー小原とスカイライナーズとは違い, 画面には出ずとも音だけで勝負したニューハードの音的な質の高さが証明された瞬間でもあった。売れっ子歌手の興行への伴奏要請は絶えず, レコーディングの機会も増え, 夜中はダンス・ホールでダンス・ミュージックとつき合い, 昼間はジャズ喫茶で本格的ビバップをやった。月に90本の仕事をこなしていた, と山木は振り返る。

「ニューハードが評価されていくのは, あるいはその時代を脱した頃からだったかも知れません。収入はぐっと減りましたが, 宮間さんをはじめメンバーたちはみんな, やはりジャズがやりたかったんです。しかも宮間さんは中でも一番新しいジャズは何かと常にアンテナを張っていて, それが見つかると何はともあれ, それに全員で食いついていくことにしました。それは64年にミュージカル"ウェスト・サイド物語"の劇伴を担当したことにはじまり, 翌年に現代音楽に影響を受けたジャズ作曲家集団のモダン・ジャズ三人の会の譜面に挑戦したことで火がつきます。やがて佐藤允彦さん, 富樫雅彦さん, 水野修孝さん, 加古隆さんといったアヴァンギャルド系の作曲家連中による突飛で難解なジャズもこなしていきますが, どれも日本ジャズ・シーンで高い評価を受け, その噂は世界にも飛び火していきました。それをこなせたのは, 他のリーダーにはない宮間さんの人を魔法にかけるような特別な資質があったからです」

モンタレー, ニューポートで聴衆を圧倒

決してメンバーに対し, 「こうしてはダメだ」とも「こうしなければならない」とも言わなかった。たとえば作家から譜面が持ち込まれると, メンバーの全員にそのスコアの解釈を尋ねる。ミュージシャンはそれぞれにプライドがあるから, 臆することなく自分の意思を表明するが, そこで宮間が選択する"一番良い解釈"に誰もが納得させられるのである。そうなると誰からも妬みが生まれることなく, むしろその解釈をより良いものにしようとディスカッションが始まり, 実際その"一番良い解釈"はさらに良いものになっていく。これが宮間ならではの采配であり, ニューハードのサウンドの魅力なのだという。

「僕の作編曲作品にもいくつか, 高く評価されたものがあります。〈振袖は泣く〉はMJQのジョン・ルイスに"これはジャパニー

宮間利之とニューハード 名盤カタログ

『ジャズ・アット・ザ・ヴィデオ』(Victor) 1958

『スクリーン・ヒット・パレード(ゲスト渡辺貞夫,宮沢昭)』(Toshiba) 1961

『ツイスト・ヒット・パレード』(Toshiba) 1961

『永遠のマーチ』(Toshiba) 1962

『モダン・ビッグ・バンド』(Toshiba) 1966

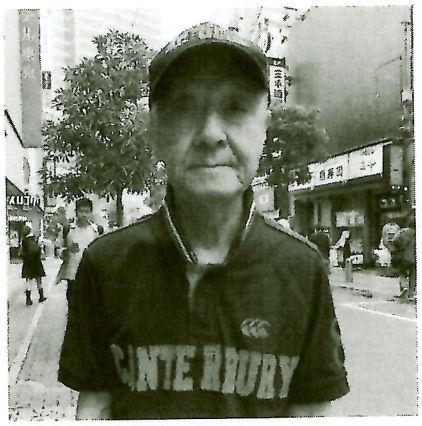
1975年《ニューポート・ジャズ祭》で,プロデューサーのジョージ・ウエイン(右端の壇上の人物)から花束を受けるニューハード。

ズ・ペンタトニックのブルースだ！"と言ってもらえ,その彼の推薦で74年に我々は《モンタレー・ジャズ祭》に日本人バンドでは初出演し,その日のトリをとる栄誉にも浴することになります。新聞・雑誌はこぞってトップで絶賛記事を書いてくれたし,そこで憧れのガレスピーとの共演も適い,彼は僕の〈マンテカ〉のアレンジを褒めてくれただけでなく,最終日はステージ上で一緒にダンスをすることにもなりました(笑)。神様と踊ったんです！　ところでその〈振袖は泣く〉の作曲には,少しほろ苦い思い出がつきまといます。クリスマスの夜の仕事が終わって帰宅中,もうそこまで家が見えてきたところで後ろからトラックが走ってきた…。覚えているのはそこまでですが,ちょうどそこを通りかかった夜間の高校の先生から聞いた話では,ドカンと音がしたと思ったら,僕がそのトラックと塀の間に挟まれて意識を失っていたんだって。すぐに救急車を呼んでくれましたが,胸は潰れているし,顔はぐじゃぐじゃに裂けていてもうダメだと思ったそうです。結局,意識が戻ったのは20日後のことで,やっと這って病室の窓から外を見下ろすと,小雨の中,振袖を着た若い女性たちがたくさん並んで歩いていた…成人式だったんですね。ジョン・ルイスにも言われましたが,僕は毎日続けて曲を書くことを自分に課していて,その日は自分でも納得がいく素晴らしい曲が生まれました」

75年には《ニューポート・ジャズ祭》に出演し,25年後には名前を変えた《JVCジャズ祭》にも招聘され,いずれでも大観衆を圧倒して帰ってくる。ニューポートでの山木は大御所ジム・ホールと,デュオによる親密なクラブ共演も果たした。その他にもニューハードは南米(ベネズエラ～ボリビア～チリ～コロンビア)やインドのヤトラ・ジャズ祭,東欧(ハンガリー～ユーゴ)や南仏ニース・ジャズ祭への長期国際親善ツアーも敢行,現地ジャズ・ファンから熱烈な歓迎を受けて帰ってくる。

「戦争が終わった時は,まさかこういう時代が来るとは思ってもみなかったし,ジャズがこんなに世界中で通じる音楽になるとは夢にも思っていなかった。だから宮間さん,モンタレーとかニューヨークへ行った頃にはもう,大満足だったのじゃないでしょうか。本場の大ステージでその日のトリで踏み,各メディアからあれだけ褒められれば,もうこれ以上の勲章はないでしょう。そして"死ぬまで現役でいたい"と言ってきた人だから,何よりああやってひとつのことを追求し続け,それを最後までまっとうできたというのは,やはり誇るべきことだったでしょう。まだ意識のある時にこっそり僕を呼んで,"オレの人生の成功はニューハードのお陰だし,山木のサポートがあったお陰だよ。山木,ありがとう"なんて言ってくれてね…」

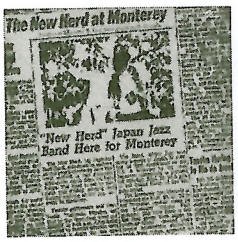
しゃべり終えた山木の顔は,長年のパートナーを失った悲しみでなく,すべてをやり終えてかつ勝利を克ち得た老兵の旅立ちを見送るような,ふっ切れた晴れやかさをまとっていた。



85歳となった現在もニューハードや自身のバンドを率いて精力的に演奏活動を続ける。因みに8月14日には東京・町田の和光大学ポプリホール鶴川において山木幸三郎ジャズ・オーケストラの公演が予定されている。

『ゴールデン・リズム&ブルース』(Victor) 1966

『邪馬台賦』(Toshiba) 1972



『モンタレーのニューハード』(Trio) 1974

『ニューハード』(TBM) 1974

『宮間利之卒寿記念コンサート』(PIT) 2012